THE SHAKAI SHIMPO
社会新報
号外三春版
１２月８日
社会民主党全国連合機関紙宣伝局
〒100-0014 東京都千代田区永田町2-4-3 永田町ビル7F

日本国民は、われらと我らの子孫のために、政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないよう・・・国家の名誉にかけ全力を挙げてこの崇高な理想と目的を達成することを誓う。
国権の発動たる戦争と、武力による威圧または武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。　陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。
国の交戦権はこれを認めない。
― 日本国憲法抜粋 ―

殘された自衛隊員の家族の悲痛な叫びが聞こえるか
＝南スーダン自衛隊駆け付け警護の即時撤退を＝

１２月８日、太平洋戦争の開始から７５年を迎えます。
軍国主義の暴走によって、国内外の多くの人々に苦しみや悲しみ、尊い犠牲を強いました。
その反省から、“二度と再び戦争をしないこと”を全世界に誓い、戦争放棄の平和憲法を制定しました。

何のための駆け付け警護か、自衛隊員を捨て石ににした平和憲法改悪

しかし、いま、戦後初めて日本人が海外の戦場で正当な理由もなく、殺し殺される事態が現実のものになろうとしています。
日本の安全保障とは全く関係のない、遠く離れたアフリカの危険な紛争地帯に自衛隊を派遣し、駆けつけ警護を名目に戦闘行為を命じ、自衛隊員を捨て石にして一挙に平和憲法を改悪しようとしています。

自分一人の勝手な思い込みだけで、子供や孫たちの未来を奪うのか！

安倍首相、あなたは自分のやろうとしていることがどんな結果をもたらすのか、一国の責任者として真剣に考えたことがありますか。
国民の声に耳も傾けず、平気で嘘をつき、口先だけの空しい言葉を並べ立て、最後には数の暴力で押し切る、それが国の最高責任者のやり方ですか。あなたに、あの悲惨な戦争で傷つき殺された何百万、何千万もの罪もない人々の悲痛な声が聞こえますか。

今すぐ自衛隊を南スーダンから撤退させ、戦争法の廃止を！！

“戦争のできる国”への安倍首相の暴走は止まることを知りません。
日本の平和主義を根底から覆し、若者たちを無謀な戦争に駆り立て、子供や孫たちの未来を奪う安倍自公独裁政権を絶対に許すわけにはいきません。
いま大きな声で叫ばなければ、いま立ち上がらなければ、日本の平和も未来も守ることができません。安倍自公政権の戦争政治に反対し、ただちに自衛隊を南スーダンから撤退させましょう。

＝戦争のできる国へと暴走し続ける安倍自公政権＝

あの日を忘れないために
反原発写真家　飛田さん（三春町）フランスへ
原発の愚かさと子供たちの健康被害を訴える！

三春町出身の写真家、飛田晋秀さん（三春町八島台）が１２月５日から１６日まで、フランスのパリ第２区役所やパリ大学で写真展を開きながら、原発事故や福島の現状についての講演を行う予定です。
飛田さんは“原発事故を風化させない、福島県民の思いを知って欲しい”と、この間、アメリカをはじめドイツやカナダ、オーストリアさらに、北海道から九州まで何百回と写真展を開きながら、原発事故の恐ろしさと低線量被曝による子供たちの健康不安を訴え続けてきました。
地震で倒壊した家屋、荒れ果てた誰もいない町、放棄されたままの町、3.11から時を刻むのをやめた時計・・・・・。
飛田さんの写真は、あの日の姿を静かに語りかけてきます。三春でも来春、原発写真展と講演会を予定していますので是非お出かけください。

＝福島の現実を風化させないために＝
次世代への警鐘として将来の日本の姿を考える種にしたい

原発ゼロへの第１歩を
東電福島第２原発を廃炉に！

とき　２０１６年１２月１７日（土）午後２時より
ところ　須賀川市民温泉２階大会議室
講師　大阪府立大学名誉教授　長沢啓行工学博士
参加費　無料
主催　社民党３区支部連合・平和フォーラム

すべての原発を廃炉にし
放射能から子どもたちを守ろう！

東電福島第２原発の即時廃炉を求める署名実施中
皆さんのご協力をお願いします！

安倍首相、あなたは
この悲しみをまた繰り返したいのか！

まず幼い肉体が火に溶けるジューという音がしました。
それからまばゆいほどの炎がさっと舞い立ちました。
真っ赤な夕日のような炎は、
直立不動の少年のまだあどけない頬をあかくてらしました。
その時です、炎を食い入るように見つめる少年の唇に
血がにじんでいるのに気がついたのは。
少年があまりにきつく唇をかみしめているため、
唇の血は流れることもなく、
ただ少年の下唇に赤くにじんでいました。
夕日のような炎が静まると、少年はくるりときびすを返し、
沈黙のまま焼き場を去っていきました。

― ジョー・オダネル写真集“焼き場に立つ少年”より ―

亡くなった妹を背負い、
唇を食いしばり必死に涙をこらえている少年

撮影されたのは被爆後の長崎。
まだ小学生である少年は、赤ん坊を背負い、裸足で一人焼き場に歩いてきたのだ。背負っている自分の弟妹である赤ん坊を火葬するために。

少年は、あの姿勢のまま、焼き場の前で5～10分たたずんでいたという。
少年のまっすぐ向けられた視線の先には、焼き場の炎が映っているのだろうか。
その炎の中に少年は何を見ているのだろう。かたく、かたく少年は口を結んでいる。声をあげて泣き出したい衝動を、必死で少年はこらえている。

父は戦場に行ったのだろうか。母は原爆で亡くなったのだろうか。他に誰もいなかったのだろう。
あの小さい体で、運命のすべてを一身に背負い、気をつけの姿勢のまま屹立している少年・・・・・。

今から70年前、どこにでもありふれていた風景。
私たちは、あの少年に対し、どんな言葉を投げかけられるだろうか。
絶望と悲惨さのただなかで、全身全霊で運命をこらえながら必死で立ちつくそうとする小さな、本当に小さな存在・・・。私たちは、この子たちに何を語れるだろう？

戦争をするための国づくりは絶対に許せません！

痛恨の反省を繰り返すのは、良識の破滅です

痛恨の反省

昭和20年 8月15日

「戦争に反対したいと思った時は、既に手遅れ、怖くて反対できなかった。もう二度と戦争には賛成しない。」
あの時、多くの国民が、そう堅く心に誓ったのです

自由民権発祥の町 三春

に、戦争法（安保法制）は、似合いません。まだ、手遅れではありません。反対は自由です。だから

戦争法反対！
9条厳守！

○○党・△△党　そして社民党、、、　戦争法反対・9条厳守・脱原発を掲げる政党・団体は、すべて力を結集すべきです

元　日本社会党・社会民主党　三春町議会議員
佐久間　茂
（敗戦時　三春国民学校6年　83才）

●平和を守るのは軍隊や兵器ではありません　●戦争を許さない国民一人ひとりの声です

戦争法廃止！ 社民党